松林伯円と三遊亭円朝

――「代塩原太助栄華物語」をめぐって――

延広　真治

(一)

河竹黙阿弥・三遊亭円朝・松林伯円、これら三者の絡み合いを究明する事は、前近代より近代への混沌たる文学状況を解く秘鍵の一つと信ずる。右の黙阿弥・円朝・伯円なる登場の順位は、鬼籍の序であるとともに、文学史上の評価、研究進展度とも一致する。とは言え伯円ひとり余りに無視され、「黙阿弥全集」・「円朝全集」、河竹繁俊博士「河竹黙阿弥」・永井啓夫氏「三遊亭円朝」に比肩すべき共有財産は存せぬ。のみならず現在刊行中の筑摩版「明治文学全集」、講談社版「大衆文学大系」等、伯円の作品を収録して然るべき全集類も伯円を黙殺する。漸くにして「安政三組盃」を復刻した「部落問題文芸・作品選集」も伯円の速記本を探索し得ぬまま、小金井芦洲所演によるという杜撰さを露呈した。従って三者相互の関係を考察する事は容易な業ではない。本稿も全く「三遊亭円朝」に負っているのである。

伯円は天保三年、円朝は同十年の出生であり、伯円が七歳の年長に当る。しかし音曲師燕屋円太郎の実子として七歳で高座に上った円朝に比して（「三遊亭円朝子の伝」）、下館藩郡奉行手島助之進の四男に生まれ、後彦根藩画師向谷源治の養子となった伯円は、講釈好きが昂じて十六才で廃嫡となったものの、職業としたのは二十歳の春と、その出発は甚だ遅かつた（注一）。にも拘わらず円朝が伯円に敬意を抱いていた事は、円太に辱めを受けた際、「伯円の弟子にならうと思ひます」と母すみに訴えたのでも明らかであり（「円朝遺聞」）（注二）、「後開榛名梅女香」を創作するに当り、伯円の「あんもの草三」を取入れた姿勢にも窺知し得る処である（「円朝全集解説」）。一方伯円も「怪談牡丹燈籠」に「円朝は贅沢だ、幽霊に下駄を履かせるんだから」と感嘆し（「円朝全集解説」）、「三遊亭円朝とか、春風亭柳枝と

かは真の名人」と讃えている。また両者の頒合せが見られるのは、明治八年二月十一日、御橋御屋における、円生遠忌、円朝主催幽霊会（「郵便報知新聞」。「明治世相編年辞典」）。明治十一年七月二十一日、両国中村楼における魯文主催の珍猫百覧会（「明治世相編年辞典」）、同二十二年十月五日、日本橋蛎殻町有楽館開場式（「続々歌舞伎年代記」。錦絵は「日本の古典芸能」九」）、更には鹿鳴館婦人会（「円朝遺聞」）（注三）、伯円の謝礼が五円の処、円朝は五十円を主張して遂に認められた紅葉館での各国公使の饗応（同）。また報知新聞社々長小西敏義邸での素人芝居「鞘当」は、円朝の不破、伯円の花魁に文治の名古屋という配役であった（「明治百話」）。しかも伯円は死の床にある円朝を見舞っている。まことに是等二人の競争者の心情は、麗しいと言わねばならぬ。

（二）

ところでここに、「代式　塩原太助栄華物語」なる一書が存する。永井啓夫氏の御珍襲に関わる希覯書である。以下に書誌を記す（注四で菊版。外題「代式　塩原太助栄華物語」。内題「代式　塩原太助栄華物語」。大和綴。表紙は木版刷で、上部は茶色地に雲繋ぎを白く抜き、下部は、白地に緑色の子持縞。上部に東久世通禧公題字・六世塩原孝君序・尾形月耕画伯絵・三島蕉窗画伯絵・松林伯円翁著作。ついで朱色の礼紙一葉に、永井啓夫蔵書の陽刻長方印一顆（紫色）。薄葉一葉。以下三頁にわたって石版で「松」「齢」「通禧書」と行書体で記す（落款陰刻「源通禧章」陽刻「熙卿」）。薄葉一葉。塩原孝の序（行書。孝は孝太郎を修す。朱印陽刻花弁形「六世塩原」）。朱色の紙二頁に伯円の緒言（以下活字）。月耕の折込口絵（木版）。以下本文が始まり頁数を付す。内題下に、某隠士補綴・松林伯円著作。席数は第一席より第八席。十三行二六字。総ルビ。各頁本文の上、横書き「栄華物語」。四四頁と四五頁の間に、蕉窗の折込挿絵（木版）。一一九頁に尾題「栄華物語上巻」。奥付。明治卅四年六月一日印刷、同年六月九日発行。実価金参拾五銭。著作権所有の欄に朱で㊞。その上に朱の長円に、両国・矢の倉・三番地・㊞書房の印。著作者、東京市京橋区木挽町九丁目六番地　若林義行。発行者、東京府下東葛飾郡寺島村元寺島千七百二十八番地　塩原ヌイ。印刷者、東京市下谷区徒町一丁目七番地　山田仙蔵。発行

所 ㊥書房。更に青色紙一頁に松林若円の舌代（頁数付さず）。以下オレンジ色の紙。内題「御前講談」◎ 桜井の巻（稲公桜井の駅訣別の条）」。内題下、松林伯円講演、松林速記所員速記。十三行三八字。十五頁。各頁本文の上、横書き「桜井の巻」。粗筋は以下の如くである。

文政二年の春、二代目太助は思うよう。「父の子と生まれ乍ら二十余年栄華にふけったは誤り、何事かなして父の志をつがん」。そこへ「気晴らしに新吉原へでも」と勧めに来たのは貞婦の玉。「永らくお前を苦しめたが」と決意を告げようとする処へ大番頭の正兵衛、折もよしと「是からの太助は家例も家風も破る心算り」と告げたので正兵衛は吃驚り。「此の世に生ある者の権利に違はない筈、然るに農工商は汗水を流し二本刀の蛆虫は安楽な暮し、日本で主人と立てるは天子様只一人。にも拘らず武士の横暴。この太助は金の力で将軍大名の不意を打ち百姓町人の為をはかるのだ」。聞いて正兵衛は「世の為人の助けとなる事業をせよ」との先代太助の遺言を打明け、将軍の勘気にふれて滅んだ壬生中納言家の青侍の子と素生を語る。一方店では、桟橋に土左衛門が流れついたとの騒ぎ。番頭友八は水死人が李右衛門と聞いて顔面蒼白。

一方所かわって上州棚下村の佗び住居には、帰らぬ李右衛門を待ち焦れるお霜お鳥母娘の姿が見うけられた。今日も今日とて宮前の鹿造が貸金との居催促、その高声に杉の森の隠居耕（郷トモ）平が入り、「いずれ立替るから」と鹿造を返し、李右衛門が深川の漬物屋として成功しているとの吉報をもたらす。母娘は江戸に出立した。二月下旬の事である。

過ぎ行く春の本所業平町の長屋では、井戸端会議の真最中。話題は母娘づれの草餅売りの詮索、「いつその事草餅を買つて、身の上話を聞こう」と一決して畳屋に上り込む。夫李右衛門を見出し得ずかく成り果てたとのお霜の述懐。それを壁ごしに聞いた金助より、炭屋塩原の悪工みに非業の死と告げられ、復讐を誓う。夢の如くに山谷の仮住いに帰ったお霜は娘に、父李右衛門が先代太助に預けた五百両の大金を請求した処、番頭友八は知らぬ存ぜぬの一点ばり。剰え打擲をうけ吾妻橋より投身と真実を明かし、「お父さんの仇は二代目太助、この恨をはらすんだよ」と言いきかした。この年七月は日照り激しく、雨乞いがさかんに行われたが効果が無かった。一夕正兵衛は喉を自慢の太助に、真実の男の遊びを伝授しましようと人払いして何事か

を囁やいた。翌日塩原の店先には二千張の傘、二千筋の手拭が山をなし、先代太助追善の雨乞いを行い、百姓を救うとの噂が流れた。愈々八月十四日天国の宝剣を床の間に飾り、太助は斉戒沐浴して降雨を祈った。店頭では芸妓幇間等をならべ、「塩原」と書いた傘、蓑の紋に「塩」の染手拭を渡し、「必ず降るから」と晴天に傘をさせて施米で混雑する浅草東陽寺に向わせた。そこへ恵みの雨。「本所の塩原は生神様」との声が巷に溢れた。実は雨が降る迄法要を幾日でも続けるつもりにしていたのである。しかし此の雨はお霜母娘を濡らす無情の雨ともなり、塩原への憎悪は深まる一方であった。

かくして翌文政三年九月三日強風の夜、塩原は裏手より上った不審火で、一瞬にして燃え上り、本所一帯に広がった。此の火を吾妻橋から冷笑して、入水しようとするお霜母娘はお召捕り。一方小梅の妾宅で急を聞いた太助は驚かず、悠然として盃を重ねる。また、塩原では正兵衛の指図で類焼者に金一両米三升等を支給したので誰も恨まぬ。この混雑を余所に太助は上京する。その留守中町奉行所より召喚された正兵衛は友八を呼びよせ五百両の行方を詰問し、暇を出す。

話変って箱根山中の茶亭に太助が休息していると十五、六の順礼。尋ねる人の名を問えば「塩原太助」と答えた。太助が名をあかせば、父の壬生中納言の息安春には死別、行方知れぬ母は土佐国魚梁瀬の人であるが、三晩続けて夢に出て「シホハラタスケ」と言うばかり。逢う人毎に尋ねると、江戸の炭屋と教えられ、かく間道を遠んで下ると告げた。太助は此の綾羽を正兵衛の主筋と敬い、「徳川の命によって据えた関所にかく御苦労なさるとは。私どもは草莽の素町人、一座出来る者ではございませんが母上様はきっとお尋ね致します」と述べるうち、夜は明け初める。

（以下は予告）中篇では綾羽に具して太助は土佐に遊び松魚漁で利を得たが、舟は暗礁で砕け太平洋を漂流。その後魚梁瀬で黄金をほり、綾羽は母に邂逅する。太助は大阪で商才を発揮。下巻では国禁を破って支那にわたり皇帝に咫尺する。

まことに荒唐無稽な作品であり、造本の事々しさに比して論ずるのも気恥かしい底の代物と言わねばならぬ。ではなぜかような駄作を伯円が残したのであろうか。よく知られる如く、元来円朝は、柴田是真より聞いた塩原家にまつわる、「井戸の中へ嫁が身を投げて死んだり、

二代目と三代目の主人が気違いになつたりしたのが、其の家の潰れる初まりといふので、そりやア何とも言へない凄い怪談」を脚色しようとして（「塩原多助旅日記」）、実地踏査の結果予期せざる「塩原多助一代記」を結構したのである。幸い三遊亭金馬代講「塩原多助後日譚」によつて、円朝の構想は窺知し得る（注五）。本書によって「弐代塩原太助栄華物語」と比較すると以下にいて最も異なる。即ち「後日譚」では、多助の義母であり叔母に当るお亀が原丹治に通じてなした四万太郎に、角右衛門を襲名させ、実子彦太郎の後見を勤めさせる。処が此の四万太郎が金を喜六より預かっておきながら、証拠の無いのを幸に取り、突き出すのが倘となって怪談になる。これに比して「栄華物語」では、四万太郎に当る役目は番頭友八であるが、四万太郎の如く塩原一族ではない。お鶴母娘が二代目太助を恨むのは筋違いの誤解なのである。しかも友八の悪事は発覚し暇を出される。これでは「怪談の種子」となり得まい。ここに本作の意図が存するのである。即ち塩原一族と怪談を切り離そうとしたのである。明治二十六年十月四日東京塩原孝太郎より沼田下新田塩原角太郎宛て書簡に、「府庁より製造の学校用教科書ニ掲るより円朝初軍談師まで寄席ニ演スあり（略、芝居上演）。菩提所東陽寺ニ何人墓参香華を手向る者あり、昨年の春学校の女教師生徒数名墓所前に唱歌を誦するを見受る事あり」と報ぜられている如く（「三遊亭円朝」）、塩原多助の名は普ねく知られる処となった。当然塩原家に取っては迷惑な怪談も、口の端に上った事であろう。「塩原多助一代記」が歌舞伎座で上演された際（明治二五年一月）、明き樽買久八の子孫が事実に相違するとの理由で、厳重に訂正を申入れている（同。注六）。久八の件と異なり塩原屋の怪談は、「円朝旅日記」に見られる如く創作によらぬ巷説であるだけに、塩原家も対策に苦慮したと思われる。この難問の解決策として、怪談と塩原屋との切離しを思い付き、円朝没後十ケ月を経て本書を刊行したのであろう。当時東京塩原家六世孝太郎は、日本橋久松町二番地で経師屋を営んでいたと言う（注七）。発行所の矢の倉三番地と指呼の間にあり、㊥書房という書に因んだ見慣れぬ書店名より塩原家との関係も浅からざるものがあったと思われ、発行者の塩原ヌイも六世孝太郎の親縁と容易に推しうる。孝太郎の序も含めて、恐らく本書は自費刊行物として世上に出たのであろう。東久世通禧の題字、御前講演の付載は、勤皇家太助と塩原屋の怪談を摩替えようとの企図

に出たものである。落語の円朝に配するに講談の伯円を以てしたのも、権威付けの道具立てであろう。

(三)

ここに不審なのは、表紙の内題下に見られる「著作」奥付の「著作者」である。円朝が自ら筆を執ったのは寄席に出勤せぬ晩年に草した、「名人長二」のみと言う。伯円においても「卓に向ッて演舌と違ひ作者の方でハ初高坐」（「新編伊香保土産」）、「机へ向ッて見た所口で云とハ大に違ひ編輯どころか変転古な可笑な本が出来ました」（「今常盤布施譚」）と記す、初期の合巻を除き、速記に依らぬのは恐らく此一作ぐらいであろう。従って今冒頭より引けば、「そもや最初（はじめ）は唯一本の天秤棒から担ぎ上げ、険しき濁世の人の心に立ち騒ぐ雨風に倒れもせず朽ちもせず」といった文体である。しかも内題下には「某隠士補綴」とある。果して伯円の著作なのであろうか。「さても〳〵此禿老爺の　の太さよ、二代の太助の大隠も此老爺に仕込まれたればか？」（第五記の切場）、はほんの一例としてあげたに過ぎぬが、文章の粗雑さは目を覆うばかりである。「今常盤布施譚」では布施糸海路東登りの文を自ら「寝言のやうな多和言」と卑下しているが、本書は正しく「寝言のやうな多和言」と言うべきであろう。仮りに百歩譲って不慣れな故の失敗としても、構想の粗策は弁護の余地を存せぬ。壮年時の伯円ならば前述の明き樽買久八に注目して資料を博捜し、新たな角度より「洛談塩原太助」を創作したに相違あるまい。而とならば明き樽買久八ならぬ美在の明き樽問屋竹下屋に生まれたのが、門人悟道軒円玉であり、その姉は伯円の外婦でもあった（「明治百話」。注八）。しかも伯円には著名な「怪談天の網打」（小濱七之助）があり、新しくは小室案外堂「東洋義民百家伝」を取り込んだ「鳴門奇譚船幽霊」が存する。伯円もまた怪談を得意としたのである。伯円は老いたのであろうか。また勤皇ぶりを強調する余りとは言え、徳川家及び武士に対する悪口が甚しきに過ぎよう。伯円も武門に生まれ殊に養家は彦根藩士であり、数々伺候した俊徳院は井伊玄蕃頭（直弼弟）の奥方である。更に養家を出て引取られたのが作事奉行に昇った若林市左衛門家であり、筒井伊賀守初め出入り先に旗本が多く、徳川家瓦嬢の後酔にまかせて官軍を痛罵したため、高手小手に縛られた程であり、「独り徳川ばかりは終りがきれいであつた」と慶

喜公の為に弁じていたと言う（「円玉情話集」。「有竹修二氏「悟道軒閑話・三」再録。「講談研究」二二九号所収）。事実「今常盤布施譚」に「賢明の慶喜公恭順の情実顕れ」とあり、「中山大納言」においても定信を敬役とする演出に反対して「勤王無二」と評し、中山殿東下りでは、「関東の武家が無礼を働き、朝廷を軽蔑すると云ふ様な条」を「子供嫌し」として省略に付す。またその名も「徳川源氏梅の薫は」「芳川春濤の原作により、長兄仙太郎は復本武揚とともに五稜郭に、次兄仙次郎は新撰組に入って二本松にそれぞれ戦い、ともに官軍の為に敗れた中西梅子の数奇な伝を描いた読み物であるが、梅子を芸妓の境遇から救うべく三百両の金子を預った犬上藤内が粗根の関で官軍に拘留されたため遂に梅子は大阪の妓楼へ売られて行く。この事態を「官軍下向の砌にハ斯様な事ハ屢々在たもので迷惑千万で御座います」と評す。「浮寝の仇夢」においては盗みを働きおとな線三郎を窮地に陥らせた黒兼を静岡で発見した除、おとなはその喜びを「先祖伝来の徳川様の御領地ゆへ東照宮の御守り下さる処か」と表現し、鎌三郎が頼っていった静岡両替町の半開堂主人隅田直澄は慶喜公の近況に触れ、「大君は世の中を巧く爽てゝお仕舞ひなされ今では清水港へ網打草雉山に獣猟に出掛られ、ズンとお気楽な御身分で御坐るテ（略）先づ此等が本等の開化人でも有ませふか」と告げる。

恐らく本作の著者は伯円ではあるまい。ここに浮かぶのは補綴の某隠士である。而して某隠士の正体は、松林速記所々主松林若円事堀田正裕と断じて誤りはあるまい。「菅公」（文末追記参照）もまた若円の関与する速記本であり、その好みは席・回に換えて「ゝ」を使用する点にも窺えるが、伯円の名のみである事は、「妾こそそのお択みに預るはづでありんすゆへ、わざ〳〵廓をいでゝ、まゐりやんしたわいナア」で十分であろう。「栄華物語」「菅公」を何故若円は伯円の名に隠れて、刊行したのであろうか。若円に就き、「悟道軒茶話」（「講談倶楽部世界」大正十三年十月号）には、以下の如くである。

若円は其当時寄席芸人を中心に演芸株式会社の設立を計画した。是は席亭の横暴に憤慨して先ず芸人の大同団結を企て漸次寄席を買収して会社の直営とする方針であつた。是は今日に於てすら猶実行の出来ぬ難事であるのに況んや今から二十五六年も以前の事であつたから、遂に半途にして挫折して了つたのであつた。

若円は元来山気の満ちた男として此演芸株式会社以外にも種々の事に手を出した結果、自然財政難に陥つて常に首の廻らぬ程の借金に攻められて居た。併し如何に負債があつても、更に勇気を挫く事なく、相変らず堂々たる風采をして常に様子のいゝ事を云つて居た（略）

大正十三年より二十数年前は正しく「栄華物語」「菅公」刊行の年時と符合する。塩原太助に御前講演、更には天満宮一千年祭と利潤を求めての企画として熟考を重ねた上での切り札と思われる。更に若円は利潤に加えて自己の主張の権威付けを求めたのである。即ち「菅公」の「口条」に以下の如くある。

（略）この演芸を、非境の底から救ひあげやうとして、種々奔走尽力の結果、大々的改良を施して、美術の名に背かざる、完全無欠の演芸を養成いたさんと、余りに力瘤を入れ過ぎたものと見えまして、大きに旧弊国守主義の、演芸者並に席亭等と、大衝突を来たしまして、終に若円は無頼人呼ばはりに会いました（略）飄然地方行きを思ひ立ち、今や盛んに改良演芸の旗を各地方に押立て、初一念を貫かんといたしつゝをります（略）

「栄華物語」には東久世通禧を、「菅公」には依田学海をかつぎ出し（注九）、若円は無念の思いを晴らそうとしたのであり、全く伯円は弟子若円の走狗と化したのである。嘗て破門した右円に三世伯円を譲らざるを得なかった事態にも伯円晩年の翳りは十分に察知し得るが、手元不如意で、しかも鶴見隠棲後人恋しい伯円は、若円一流の壮語に眩惑されたのである。名を貸すはまだよい。御前講演上梓の機を得て、心中の愉悦大いなる余りであろうか、取り返しのつかぬ過誤を犯す事となったのである。

僅か二頁五百余字に過ぎぬ「緒言」がそれである。左に録す（新字体に改め、ルビは殆んど省略した）

抑も該二代塩原太助栄華物語の、巻を繙かるゝ前に愛顧諸彦の特に、記臆に供さゞればならぬ一事こそあれ、そは初代太助の太の字義にして、已に該著を起さんとして、筆を執るに先ち、現に塩原家の血統として、当時久松町に居を占めらるゝ、六世塩原幸君に付て、同家の系図より当代の、事実経歴を普く調査の際、初代太助の太の字義に付き、後来伝ふる所と、相違したるを発見せしより、尚ほ同君に明細に訊し、進んで全家菩提所の、浅草東陽寺の過去帳

に付て調ぶるも、何れも多は誤りにて、太の文字こそ正確なるを、認むるに依り、爰に親友なる故三遊亭円朝が、初代一世記を口演するに至り、太助を多助と口演たるは、とは同子が杜撰、とは云へ無痕の捏造に成りしに非ず今尚ほ彼の地に存在せる上州榛名山の朱塗の橋に刻みたる、塩原多助の銘に基きたるにて、少しく粗漏の恐れなきにあらねど、人誰れか過なからん、弘法にも筆の失策を後に、京童の言の葉に乗りしに非ずや、依て聊か同子の霊に代り、爰に訂すも決して故人を譏するに非ず、また不肖の著述を完全無欠と慢ずるにも非ず、唯々誤りの水く後世に伝はらん事を恐れ、加ふるに地下先代の霊魂を、慰むるよしもかなと、こゝに拙言を頓りみず、無辞を並べて緒言に代ゆると云爾

署者　伯円

識す

「親友なる」円朝没後十ケ月の、此の伯円の行為は異常である。鈴木古鶴「塩原多助後日譚」解説には（円朝全集・十三」）、書名を伏せ、「円朝は太助を多助と書いてゐるのは調べが届かないなど、自分の方の調べの届かない事を自白しながら攻撃して居る滑稽なのもあつたやうに思ひます。『円朝手記』にちやんと太助とあるので一切明瞭であります」とある如く、円朝は太助なるを知っていた（注十）。伯円は実在の太助から、虚構の多助へ。俗談から致富譚への創作過程を顧慮せぬのであろうか。何故に小児の如く、一字の違いを論わねばならぬのであろうか。此処に九代目団十郎の活歴を想起する。衣裳諸道具を官職故実に近づけ、白粉をぬらず、台詞を談話のように言おうとした団十郎を支えたのは、「近代的価値意識」即ち「〈実〉にたいする信頼である」と言う（今尾哲也氏「変身の思想」）。伯円も又史実を尊んだ。「今常盤布施譚」に「講釈師見てきたやうな嘘をつき」を打消して、「成丈正史を演説なし、或ハ草紙の編輯も実録ならでは書録らず」と記し、「太平記などには十一歳としてあります、又た確学なる書物には十六歳といふのでございます、或ひは十三歳、ソコデ演者も小補公打ち死に年齢など合はんでは甚だ不都合で、粗漏杜撰のお叱りを受けるのも口惜うございますから、或る博士について段々聴くと、是れは十三歳が確実であらふ、其の言葉を便りに致して始終十三歳と講演いたし来りました」とその理由を述べている（注十一）。しかし一方においては団十郎が、助六実は曾我五郎に扮した如く、伯

円も「俗受」を顧慮して必ずしも史実に忠実ではない「中山大納言」を得意としてあり、しかも本作は東宮殿下御前講演の読物に選ばれている（拙稿「『お富与三郎』説話――松林伯円その一――」。「近世文芸稿・十八」）前述の「今富盛布施譚」のしかも巻末に至って、「宣告の趣きが違ふてあると有名の法律学者岡本忠造氏が予に忠告ありしが元来報知新聞より抜萃なしたる物語り故原新聞をたよりとなせバ四方の君子僕が麁漏を咎め給ふことなかれ」と責任を回避し、「新編伊香保土産」三編自序には「七虚三実」と居直り、「藤田の初雁」で藤田伝三郎を暴飲家とした為、下戸の当人か伯円に注意を促すと「餅の上で暴れさせては毒談になりません」と平然たるものであったと言う（「故松林東玉伝」既出）。矢張り此の「結言」は余りに狡量苛烈と言うべきであろう。其因は他に求めねばならぬ。

（四）

周知の如く相拮抗した二人ではあるが、旧幕時代においては伯円が先行し、明治十年後半で遅れをとる如くである。安政四年正月市村座初演「鼠小紋東君新形」は九十日余も打ち続けたが、伯円原作、黙阿弥脚色、四世小団次主演である事は言うまでもなく、七月興行「網模様燈籠菊桐」も又同様の顔触れであった（永井啓夫氏「市川小団次」参照）。しかも前述の如く旗本に贔屓が多く、年僅かに二十六歳、円朝は年下故伯円の後塵を拝するのは当然の事乍ら、未だ場末の真打であり、鳴物断も始めるに至らず、創作第一作「累ケ淵後日咄談」の発表は二年後の事である（「三遊亭円朝」）。伯円を仰ぎみる思いであったに相違ない。御一新の後も伯円は、明治四年八月九日、断髪廃刀令公布されるや、本町河岸辰床で一円五十銭にて断髪（「浪花嵐東男」）。同六年四月教部省に教導職が置かれ、大講義を拝命、早速数名を語らい浅草寺境内に於いて、「諸新聞ノ中緊要ノ箇条、及ビ菊地容斉ノ著セシ前賢故実並忠臣孝子ノ列伝等ヲ講釈」した（「新聞雑誌」一二〇号、明治六年七月）。同年中早くも洋服を着用。翌七年一月佐賀の乱が起れば、直ちに「佐賀伝法録」と題して講じ、際物読みの新分野を拓いた。同年九月二十四日「郵便報知新聞」に「演史家松林伯円」と記される。「御維新の活歴史」たる「近世史略」を読んだ故であろう（「明治百話」）。此処にも伯円の姿勢が窺える。更に同年十月二日「郵便報知新聞」によると、椅

子・テーブルを用いて銀座四丁目松邑亭で「郵便報知新聞」を読んでいる（「明治世相編年辞典」）。是より新聞種が流行り、円朝も追随した。伯円は新聞講談の祖となったのである。十年十月一日の同紙には、旧来の昼席を改め婦女幼稚の知覚を導く条々を、漢和二書に基いて俗談平話に説く、「童蒙演舌会」を木挽町福田亭で始める旨報ぜられている。啓蒙家伯円の意気壮んと言うべきであろう（「明治演説史」）。同年十二月二十三日「東京曙新聞」には、二十一日柳橋万八楼上での自ら主催する「新講談会」に於いて、「独逸の賢婦ヲチリヤの伝」を演じたとある。後の「獨逸婦オチリヤ艸紙」である（注十二）。翌十二年三月二十七日「東京新聞」によれば同じく神田新泉楼での「新講談会」席上で、「西洋曾我仏国奇譚」を読んでおり、舶来物への取組みは円朝に数年先行する（注十三）。遂に、十四年一月十二日「諸芸新聞」八号所載「芸人評判記」には、「開化講談の元祖人気取の大隊長（略）尤も新奇を旨として流行に一歩を後れぬ処ハ頗る感心」と記されるに至る（注十四）。一方新奇を追う余りか、依田学海を訪れ、同業者が三尺物、白浪物果ては役者の真似をする事を嘆き、「講談師の稼業はやめて別にお上からお許しを受けて新しく出直したい」と相談し、学海より仲間を気にせず業を磨けと諭されてもいる（「学海日記」）。「明治人物逸話辞典」所収。注十五）。次いで円朝の「怪談牡丹燈籠」に先じられたものの、十八年十二月より「安政三組盃」を順次刊行、講談速記本の魁となった（注十六）。作中「徳川家の時代から見ると、只今の世の中の善いことハ堯舜の世とも申しませうか」と昭々たる明治の御聖代を讃え、台綴に当って付した「徳川盛世日記序」には、「旧幕府之専横而諸侯暴慢、有司貪戾、下民苦塗炭之弊」と「新政府之寛仁而政治公平、百官謹勉、下民浴恵化之恩也」を対比させる。加うるに「旧弊な事を云ふ奴を。説破するのが伯円の職掌で。頑愚を誘導する職掌です」と、大講義としての自負を示す。而して生涯の晴れたる御前講談を謹演するに至るのである（注十七）。西洋料理を好み、ストックのビールを愛飲し（注十八）、「人民は税を取られるなどゝ申します取られる訳ではない（略）国といふものは矢張己れのものなれば己れのうちに預金をしておくと同しことであります（略）伯円などは勤王愛国の志があります故左様観念致して居ります」と説く時（嵯峨廼夜桜」）、「東京の恐れ多くも太政官からお発布になりました（略）人は嘘を吐くかしらんか太政官に嘘はない

」と作中人物に語らせる時（「天人娘」）、「浮寝の仇夢」で、鯵三郎が犯人を自ら捕縛せず、「法律といふものが有るから吾儕が手出しを為て彼に疵でも負はせると理を有ちながら非に陥るから」とおとなを諭す時、「支那征伐」を「不肖伯円大声三呼して諸君と共に万歳を祝さんと欲します」と結び、十号活字で（天皇陛下万歳　帝国陸海軍万歳　帝国万歳」と印刷する時、正に伯円は「明治」と倶に在ったと言い得よう（注十九）。

しかし一方伯円にとって明治政府は、取締り令を頻発するお上であり、伯円は取締られる芸人の一人であった。例えば明治十一年一月二十九日付「東京曙新聞」によれば猥褻な講談及び怪談で灯火を消して暗くする事が禁ぜられた（「三遊亭円朝」）。十五年三月五日刊「諸芸新聞」六十五号には講談師が政体、及び貴顕を云々する故巡査が臨席（「寄席恋慕帖」）。二十年四月一日より窃盗・強盗の履歴を演じる事が禁止された（「明治世相編年辞典」）。伯円はその渦中にあって、如何なる行動をとったであろうか。例えば「怪談小町娘」には不忍の池の出合茶屋における小網と高岡幸十郎の色模様を述べるに当り、「猥褻にわたりますゆゑ簡単と」と、省略する。また「嵯峨廼夜桜」には「幽霊は所謂神経病にして落語人情噺の方にても怪談を読み灯明を消すことは成らん是より追々成長をなす幼年の者が眼に怪しい物を見たり或は耳に怪談を聞いたり何かすると自づから神経が弱くなり活潑の精神を失なふといふ処から明治五六年より十年頃は怪談といふものは殆んど廃止のやうに相成りました」と怪談を演じなかった事情を述べる。更に明治の一大疑獄と言われた藤田組贋札事件に触れざるを得ない「藤田全盛鑑」には同事件を、「奇怪なる噂」であり「全たく妄誕不稽の説」と判決を支持し、「罵詈いたすの、或ひは誹毀いたすのと、然やうな事ハ謹つて演べません」と断る。加えて拘引された山口県令・藤田組顧問中野梧一の七律を巻頭に掲げる。確かに慎重である。しかし例えば「嵯峨廼夜桜」において、小森半之丞が鰥生した妻の挙動の不審なるを捕手に告げる場面で半之丞が、「閨房中に怪しく思ふ事が有升」と告げ問い返されて「遙かに増して荒淫」、と答える。光陰に関守なしの意かとの問いに、「荒い淫と申す」と説明すれば、「淫乱になつたと云ふのですか」、「俗に申せば左様」、「結構ぢやア御座いませんか」と続いて行く。また「徳川源氏梅の薫」には、書肆鈴木金輔の「少しは猥　も然るべし、猥褻に似たる教育といふ事もあるから然う伯円子の如く道

徳計りを主張されては本が売れぬから其の責は書肆か背負て立つゆゑ」との言を記し、「色気沢山と演かす積りではありますが併し法律の罪人となるは難渋で在りますから程能く中を取て」読むと断る、是等は猥褻な演出を実際には行っていた事を示唆する条と見なせよう。また「濡衣清玄」には再び怪談を演ずる後めたさを、「聊か開化人の気取りで居りましたが（略）斯かる怪談めいた事を述べまするは看客諸君に恥し入りますること」と表現し、更に、「地で義経狂言の歓迎されるを述べる条では、「義経を喪びまする事今に於て東京人の東照宮を慕うが如く」と徳川恋しの情を洩らす。殊に泥棒伯円と謂われただけに、白浪・白浪物に対する態度は滑稽に近い。「新編伊香保土産」の初編、定連と名告る「横浜の砂燕」の序に（注二十）、義賊に言及し「其物たるや決して彼等が労力を積たる節倹の余金に非ず到底人に恵むも私用するも均くこれ盗なり兇賊也」と極付け、「ドロバウ伯円」も「教導師の尊称を辱うするに到て大に視る所ありて如斯有害無益の雑談を童蒙の耳朶に触るを触て張扇と共に断然之を捐棄」したと記す。処が本話の主人公関口文七は「悪中にも義気」ある男であり、その行動を「盗賊なからいさきよし」と讃える。しかも後に常盤座で上演された際、伯円も舞台で演説し、関口文七を観客に紹介している（「侠客故郷廻春風」。注二十一）。次に神道大講義松林伯円演述と銘打った「回転燈籠」においては、「昔と事更り警察と云ふものがあれば心配ない」と、袖にした許婚の復讐を恐れざる様娘お蓮を安心させて抜け目がない。処が「為弱小僧」では「巡査さんが絶ず巡つて居て下さるから（略）斯様な安堵な事ハございません」とあって、「天の網を遁れ〳〵て累年悪事を働いて居る賊の数ハ中々沢山ございまして」と続くのである。当代に取材した白浪物を演ずる限り、神道大講義とは相容れざるは自明である。ともあれ「霊験」に言う畑く「盗賊話ハ暫く廃て居」た伯円が、「四十年来名代の講談」たる「天保怪鼠伝」を上梓したのは明治三十年九月（上）、三一年一月（後編）と遅い。恐らく機会を伺っていたのであろう。後編木花園主人の序に、鼠小僧を「今の世に多く見る所の。彼の法律を学ひて法網の潜り易からん事を工夫し口に道徳を説きながら心に敗徳を思案する。偽学者や偽善に比ふれはいさゝか恕すべき所なきにあらずかし」と弁護し、「地獄に苦しめる鼠小僧の追福を祈」っている。伯円は冒頭に仇名に言及し、「仮令悪名にいたせ天下に其名を掲げるといふは先づ演芸者の本望としなければなります

まい」と自ら慰め、自ら誇る。そして「其行ひは賊にいたして、心持は一個の侠客」と言い、「斬死に処せられましたから、これで罪は消へて居ります」と鎮魂する（注二十二）。而して伯円の遺る方ない憤懣は、「明治叛臣伝」（金蘭社版）となって迸る。即ち江藤新平を先生と尊び、「言語にも尽し難き程の大志がありましてなか〳〵故郷の佐賀に於て乱を起すと云ふ意ではなかつた」と述べ、「色々事情がありますから唯今講談に述る事も出来ず況て後世に残す所の書籍の上に之を現すことは出来ませぬ」と口ごもるに至り、誇らしい大義名分の称を「近々御返納致さうと存して居ります」と語る。栗本鋤雲の眷顧を受け、小室案外堂と親交を結び、田岡嶺雲の注目する伯円は、もはや「明治」と倶にあったとは言えぬ。山県公に従って沖縄に赴いたは夢であったのだろうか。伯円は七十に垂んとして己の居心地の悪さに気付いたのである。

（五）

一方円朝は明治五年、富士松梁朝の誤解により窮地に立ち、打解を計って芝居噺を三代目円生に譲り、素噺に転じた（「三遊亭円朝」）。しかも同年十月五日、「歌舞伎同様の所作致候向も有之趣に相聞以之外」と、芝居噺は禁じられた（「講談落語今昔譚」）。また明治十九年一月、枕などで政治問題に触れざる様、門弟を説諭。十月警視庁より続き物を演ずる際、先ず前夜の梗概を話し勧善の趣旨を誤らぬようにとの通達があった。円朝は警段の高座と異なり枕を述べず、「直さまその話の全体趣旨と善悪の人物の所行を掻撮みて、例の弁舌にて説明し（略）誠に手軽く勧懲の旨を説きたるは感服なり」と「東京日々新聞」の記者を感心させたのみならず、客席の警視もその手際を三嘆したという。実に円朝は、己が運命にも「官憲の通達にも逆うことなく、それを芸に活かして時代の好尚につとめて合致させようと努力し」たのである（「三遊亭円朝」）。而して「時代の好尚」を十二分に汲取ったのが「塩原多助一代記」である（注二十三）。円朝は初めて東京人から愛される人物を創出したのである（小島政二郎氏「円朝」）。「昼の世界」に住み、「昼の魅力」を備える塩原多助は、確かに明治と倶に存したと言い得る（注二十四）。多助は「これ金宜く聞け、己ア見ろ、雪が降っても風が吹いても草鞋穿きになつて寝る目も寝ずに稼いでゐるに、汝は何だ、銭箱の中え入つてゝ楽をしようたつて、さう旨くはいかねえ、

稼いで来う稼いで来うと金の尻つぺたを打つと、痛いもんだからピョコピョコ出て往つて稼いで帰り、疲れたからどうぞ置いておくんなさいと云つても、己アかうやつて稼いでゐるに、汝そんな弱い根性を出しては駄目だ、稼いで来うと云つて又尻ぺたと打つと、痛いから又びよこ〳〵飛出しては稼いで来る、終えには金が疲れて最う働うけねえから何うが置いておくんなさい、最う何処へも往きません、貴方の傍は離れませんと云ふから、そんなら置いて遣るべいといふ、これが本当に自然に貯る金と云ふものだアよ」と、久八に己れの金銭哲学を説き、着物も食物に関しても同様の見解を述べる。然るに伯円は「明治叛臣伝」（金蘭社版）に、「人間といふ者は然うどうも稼ぐばかりが能でもありません、間には己れが好きな道で少しは気の保養もしなければならず、肉体へ肥しもしなければならず、又精神へ肥しをもしなければなりません」と説く。円朝は「塩原多助一代記」の局を結ぶに当り、「正直と勉強の二つが資本でありますから、皆様よく此の話を味つて、只一通りの人情話とお聞取りなされぬやうに願ひます」と念を押し、若林玵蔵はその序に「子弟の教戒、商家の亀鑑となり、世を益することと少々にあらざるべし」と、有用の書なるを強調し、渋沢栄一は「一代記」より知った太助の事蹟に持論の「道徳経済合一主義」に合致する処多きを思い、「世教を裨補すること、蓋し鮮少にあらざるべし」と「塩原太助翁之碑」建碑式の祝辞で述べる（秋本正義氏「渋沢栄一と円朝・四」・「円朝考文集・五」）。伯円は常に「芸人と云ふものは、もと〳〵むだな稼業だから、むだを慮れてはいけない」と弟子に説いたと言う（「円玉情話集」。有竹修二氏「悟道軒閑話・三」再録。「講談研究・二二九号」）。円朝は「上品を装つてゐるのではないかと疑はれる程」の人柄であり（「講談落語今昔譚」）、造園、茶道、書道に一見識を有し、酒のみならず万事に溺れることがなかったと言う（「三遊亭円朝」）。殊に博奕を厭い、花札に夢中の贔屓客の数取の白石を墨で塗って無勝負とした上に、「人民の上にお立ちになる方々で斯ういふ事を遊ばすのはよろしくない」と意見を加えている（「円朝遺聞」）。伯円は森暁紅によると「頗る大酒」で「女は好き」と言うものの、医師の忠告を容れ、愈法発布の日にビール二ダース酒四升を飲み干して以後盃を持たず、また後者も「唯愛するに過ぎず、四畳半式は好まなかつた」とある。自らも来し方を振り返り、「決して悪事はこれまで致したことはございません、唯女が好き

で、酒も飲み勝負事も随分やりましたこともあります、然し下手だから諦めました」と言う。晩年半身不随となって口が利けず「社会の廃人」と自嘲し、「夫婦とは名のみ」の別居をしても（「明治百話」）、未だ世間には間々ある話と言えよう。しかし「下手だから諦め」た筈の手慰みで、家屋の売り代大枚七百円を一夜で失うに至って（同）、晩年の不如意は頂点に達する。円朝にも一子朝太郎はじめ悩みは尽きなかった。然り乍ら円朝は、伯円が西南戦争で西郷「先生」を思い焦慮に耐えざる頃より参禅し、三年にして無舌居士を与えられた。是より円朝の行住座臥、春風駘蕩たるものがあったが、伯円は煩悩の赴くままに憤慨し、歓喜し、煩悶し、小便を垂れ流して、淋しく鶴見の隠宅で歿するのである。

而して円朝と伯円の明暗を余りも過酷に分けたのは、明治三十年である。即ち歌舞伎座七月興行の演目は伯円原作「小猿七之助」であったが、「淫猥極まれる狂言」として警視庁より注意を受け、興行を中断。是に懲りた主演の五代目菊五郎は、市村座十月興行において「塩原多助」を再演、大当りをとったのである（「三遊亭円朝」）。此処においてせめてもの心遣りに「太助の太の字義」に固執せざるを得ないのである。「新編伊香保土産」の主人公関口文七は、「夜明前が此方の得意だ」と言う。遂に伯円は昼の魅力を持つ人物を創出し得なかったのである。伯円も前述の如く積極的に新時代の好尚に合せようと努力をした。「回転燈籠」の女秀才お蓮は、「夫となるものと婦となるものとの承諾もなく親々が定めるとは真の親たるの理に背て居ると思はれます」と演説する新しい女性である。「濡衣女清玄」の洋学を学んだお豊も「女子は男子の為めに、圧制せられて居る（略）今日でハ少し女権の拡張も出来るが、妾しは之れを世の中に実地に行つても見たし」との抱負を有する女性である。処が前者の結末はお蓮は安田芦水の本妻、お雪お千代姉妹は外妾、「三人は腹同胞の如くなり睦ま敷」く暮すと言うのであり、後者も妹お春は秋山采女の本妻、姉お豊は外妾に納まるが「其処は真実の姉妹の間柄でハあるから固より承知致します」と、共に目出度し〳〵となっており、宛然人情本の世界である。また「安政三組盃」では鈴木藤吉郎の出自につき（注二十五）、「只今でハ明々白々たる。三千五百万の我々の兄弟分で。決して賤しめる訳ハありません」と大講義の見解を示し、藤吉郎の出自を知っても尚「私ハ両親とハ丸で心が別で（略）一旦惚れた上からハどう断念が付きませう」と慕

うおあさを描出する。藤吉郎も又「当家の主人が厭やがるハ更に無理とハ思ハんが其賤しめられる此身をお慕ひ下さるお志ハ源二郎の身に取つて忝けないが」と固辞し、「お前の身を汚さなかつたのハ。此上もない幸福」と語る。もしこの後、藤吉郎とおあさが結はれ、津の国屋小染の如く渡米するとの筋立てならば、島崎藤村の「破戒」の先蹤作ともなり、太政官布告の主旨にも適うと言うものである。処が藤吉郎は気が変り、「随分人の悪い男ゆゑ」父親への立腹よりおあさの愛を受け容れる。更に素性を知った篠原太助を殺害して改名、与力となって羽振をきかすが出自の漏洩を恐れて殺生を重ね、遂に入牢中毒殺されるのである。同じ悪業を描いても何故藤吉郎に同情が集まるように結構しなかったのであろうか。是では藤吉郎は全くの悪人であり、「頑愚を誘道する職掌」である大講義の使命と矛盾する。また「袖ケ浦血染錦」の主人公弓術指南浅井宗三郎はふとした縁で「賤しき者の娘」お類と結ばれ一子宗太郎をあげる。処が、お浜座敷御的御上覧の折、将軍家斎は宗三郎を遙かに見給い「首なき者が何を以て弓矢をば携へて出でたるか」とお仰せられ、宗三郎も急疾の為矢を引けず面目を失う。宗三郎の身体が汚れているとの噂を聞いたお類は懐剣で咽喉を突く。書置きを見た宗三郎は「苛責の鬼は此の宗三、免して呉れコレお類」と号泣する。割腹を止められた後、宗三郎は品川新宿松坂屋小照に通い、小照の心にもない愛想づかしを真に受け夭刀村正により八人斬殺するとの筋立である。お類の一件は発端に過ぎずむしろ小照の方が重要な人物となっている。此の作品とても、宗太郎の生長を本筋とした展開を計り得なかったのであろうか。

破綻をきたさぬ作品も存するとは言え、遂に伯円は「明治」を理解しなかったと言わざるを得ない。明治人は何よりも理想を求めたのである。円朝はそれを知悉していた。「黄薔薇」は元老院議長道野辺清美の奸計を描くとは言え、結末は明るい未来を予知させる。実に怪談の代表作たる「怪談牡丹燈籠」すら、孝助に「お前はどうも危い身の上でナア、剣の上を渡るやうなれども、それを恐れて後へ退るやうな事ではまさかの時の役には立たん、何でも進むより外はない、進むに利あり退くに利あらずと云ふところだから、何でも臆してはならん、ずつと精神を凝して、仮令向うに鉄門があらうとも、それを突切つて通り越す心がなければなりませんぞ」と励ます。寄席の観客、速記本の読者、それぞれ己が身に引き比べて処世訓としたであろう。円朝は「夜の魅力」を描

いてもなお「昼の世界」に通用しうる方法を発見したのである。その方法とは外でもない、人生如何に生くべきかを陰に陽に示すことである。塩原多助は修身の教科書中の人物となり、伯円の講談は泥棒を輩出し、自らもその故に取調べを受けた（「痴遊随筆」）。伯円は「昼の世界」の理想を示し得なかったのである。此処に太陽の光に凋む槿花の如く、夜の伯円は昼の円朝の前に屈したのである。伯円が円朝を見舞った際、既に意識混濁した円朝は伯円に、「誰かが私を殺しに来るようだ」、或いは「誰かが懸け合いに来る」と話したと言う（「三遊亭円朝」。注二十六）。円朝の末期の眼に、伯円の背後に何人を見出したのであろうか。正しく越智氏の所謂「もう一人の塩原多助」に相違あるまい（注二十七）。円朝が腹案に止めず「後日譚」を演じたならば、「夜の世界」の多助を呼出したならば、修身の教科書にも載らず、御前講演にも演じ得ず、何よりも明治の顕臣の愚顧を受け得なかったであろう。伯円の背後に「もう一人の塩原多助」が立ち添ったのも当然である。而して題字を鍋島第行幸の際の倍従の一員東久世通禧に依嘱したのは皮肉と言う外はない。　我々にとってこの人物は、七卿落ちの一人としてよりも、況して伯爵・枢密院副議長としてよりも、津軽金木町なる旅館「斜陽館」二階八畳の間の襖に、七絶を草した人物として耳近い。その結句は「砧声断続響斜陽」とある。この詩に太宰治が幼時より親しみ、代表作に「斜陽」と題するに至った事は容易に想像し得る。「栄華物語」の序に、かくも、円朝を鞭打った伯円こそは、明治を理解し得ぬまま、生涯の落日を迎えていたのである。

注　記

一　伯円に関する記述は断らぬ限り、拙稿「松林伯円の基礎調査」（「名古屋大学教養部紀要。人文科学・社会科学。十七」）所収の資料によるが、思い出の事として矛盾がまま存する。

二　「円朝遺聞」中「誤まられたる逸話」に、「円朝と伯円とが一つ長屋に居て、兄弟分の盃をし、二人共二朱三百の屋賃が滞つて店立を喰つて泣泣袂を別つたといふ事が、松林若円といふ人の円朝逸事に載せてあるが」と否定する。万年一氏「三遊亭円朝逝く」（「円朝考文集・五」）に紹介された、「円朝逸事」（「塩原多助後日譚」所収）が該当する如くである。又宮尾

しげを氏蔵「落語家講談師しくじり談」所収「三遊亭円朝と松林伯円の邂逅」も（同号）、類似の逸話である。

三　「今の錦輝館のところ」とあるが、錦輝館は、神田錦町三丁目に明治廿四年十月九日開場しており（「明治世相編年辞典」）、鹿鳴館とは場所が異なる。

四　書誌に付き前掲拙編「松林伯円の基礎調査」との間に齟齬が存する場合、本稿をお採り頂きたい。

五　円朝全集巻十二に「塩原多助後日譚」は収録されているものの刊記が存せぬ。尾崎秀樹氏「英雄伝説」には明治三十三年五月初版、酒井淡海堂発行、従って円朝生前の刊行となり、円朝歿後を描く序文と矛盾する。「おかしの本はどうもうつかり信用できない」とある。前述の万年一氏紹介になる「塩原太助後日譚」は同年十二月廿七日印刷、三新堂発行である。恐らく万年本の刊記が正しいのであろう。

六　「三遊亭円朝」によると、「後開榛名梅ケ香」で厳役にされた尾崎直右衛門の子孫も、「世間の誤解をあつめ迷惑をこうむっていたという」とある。

七　「三遊亭円朝」によると孝太郎は弘化三年生れ、明治十三年より久松町二番地で開業とある。明治三十四年は五十六歳に当る。なお五代秀三郎狂死後、待合梅屋を経営したのが、スイか否か知るを得ない。

八　「故松林東玉伝」（「天鼓」三号。明治三十八年四月）に、伯円の西南の役の戦況視察を「郵便報知新聞」が吹聴した所、「此新聞を見た本所相生町二丁目の樽問屋、竹下屋久八といふのがやつて来ていふには、馬鹿々々しい、危ない思いをして鉄鉋玉の下を潜つて来ねば、講談が出来ぬ程の先生でもあるまい、こゝは一番世間のものを馬鹿にして、何処か近くの温泉場にでも遊んで来て、只今帰りましたと出るのが一番知恵があらう、と斯うだ、伯円もこりや最もだと」、箱根へ出掛けたとある。円玉一家と親しかった事が窺える。

九　「依田学海日記」（明治二十八年二月二十八日）に「講談師松林若円ノ招キニ応ジ木挽町ノ万安楼ニ於テ其清国ニ往クヲ送ルノ序文ヲ朗読ス」とあり、「送松林若円之清国序」が「遺稿巻十三」に備わると言う。

十　「上州沼田　下新田日記」（「三遊亭円朝」）は「塩原多助一代記」後の事とて、実在の太助と作中人物の多助と混じている箇所もある。

十一　門弟松林伯知の「補正成」（「御前講演」民友社。大正元年十月）は、十一歳として演ずる。古典大系本「太平記」（慶長八年古活字本）巻十六「正成下向兵

車事」には十一歳。巻二十六「正行参吉野事」には十三歳とあり、一書中で不統一である。従って水戸家の「参考太平記」巻二十六「高師直師泰発二向河内一楠正行参二吉野一事」の本文に十三歳とあって以下の如き割注がある。「十三歳、今川家、毛利家、北条家、西源院、南都、天正本、作二十一歳、一按、第十六巻正成下二向兵庫一段、諸本並云、延元元年正行年十一歳、今作二十三、一相齟齬」。（一行に書改めた）

十二　速記本の緒言には、封切は同年十一月十六日九段坂上偕行社とあり、「寄席に演じましては余り高尚すぎ」る事を顧慮して演じていないとある。

十三　「新聞集成明治編年史」には「西洋曾我、仏国奇譚」とあり、「明治世相編年辞典」には「西洋曾我仏国奇譚」とある。今仮りに後者によった。

十四　伯円は所謂中年よりの講釈師故、基礎修業の階梯を十分には履んでいない。「明治叛臣伝」（金蘭社版）に、「平場と名付る戦争を講演致すことは己が嫌で最も下手」とある。また明治九年五月二十三日「郵便報知新聞」に伯円の伊香保だよりが掲載されているが「積年演舌を以て業をせしゆゑにや肺を損して順天堂老先生に痛く発声を禁じられしかば」とあり、明治二十一年十二月刊の「噂高倉」にも「僕近年ハ宿痾の為めに元来の英気を減じ音声も壮年の如くでございませず稍もすれバ高座の呼吸を潰し升」と休席を詫びる。伯円が才を頼んで新奇を追ったには二世左団次と同じく自己の難点を隠そうとしたのではあるまいか。

十五　「源平盛衰記」（巻三一）に崇徳院に関して、「有名なる依田百川先生の方へ参つて此度夫々の事を窺ひ以て之を講演いたします」とある。

十六　「若翁自伝」に「これは円朝ほどには喝采を博することは出来なかつた」とある。この時点では明らかに伯円は円朝の後塵を拝している。

十七　御前講談に就いては疑問が多かったが、「明治天皇紀」八巻により、明治二十五年七月九日、新築なった永田町鍋島第と判明。晩餐後別室で、春風蝶柳斎の奇術、伯円・如燕の講談が演じられた。如燕は四日の後藤象二郎第行幸に際しても招かれている。因みに諸書の記載を主張者・年時・場所・典拠の順に左に掲げる。

伯円　明治七年七月九日　鍋島邸　「松林伯円経歴談」（明治三十二年一月）

円玉　同十九年三月一日　鍋島邸　「講談落語今昔」（大正十三年六月）

伯知　同十九年四月　鍋島邸　「御前講演」（大正元年十月）

右円　同二十五年七月上旬　不記　「弐代塩原太助栄華物語」（明治三十四年六月）

本人は固より他も直弟子であって、信憑性は高く、しかも斯様に細部が見られるのである（伯円のは十七年の誤植かと思われる）。なお伯円の読物中鍋島家に由縁のあるのは、「嵯峨廼夜桜」である。「地名を山城の嵯峨と定め尚ほ又た其の中に高貴なる御方の名の出る事は成たけ省きまして穏やかに講演をいたします」と断り（本文では肥前の嵯峨・佐賀で演じている）、鍋島家の名は殆ど出さず専ら、嵯峨の大領・大守を使用している。しかも「聡明英智の嵯峨の大領」と言った表現が多い。加えて高井検校殺しを小林半之丞の忠義より起ったとし、「一説には嵯峨の君公が早まって刃に掛け玉いしなど申しますが聡明なる処の嵯峨の大領は中々左様の事のあるべきとも思はれません、全く半之丞の業に相違ないといふ事であり升」。怪談の起因を鍋島家と切り離す方法は、「弐代塩原太助栄華物語」と同工と言うべきである。なお「安政三組盃」においてもお染を羽子板で見染め妾に所望する大守につき、「少しくお名前は憚りますから申上ませんが。お上屋敷は三味線堀にて、廿四万石」とあり、「傘の代りに成ると云ふ様な。大きな歎冬の出来る所」と述べるが、佐竹・秋田と明らさまには言わぬ。

十八　「明治百話」。なお「濡衣女清玄」の米吉お豊作並温泉出逢いの場で、米吉は「マア麦酒を一杯」と拒め、「ストツクで御座いますか」とお豊は受けている。「新編伊香保土産」二編自序の「横浜出稼ぎ中鉄橋富竹亭の奥二階洋酒を傍において」の洋酒も、同様であろう。

十九、「新編伊香保土産」四編にも税に関して同様の見解が示されており、「富国といって国を富すのだ」とある。

二十　「痴遊随筆」中「書生芝居の回顧」に、「劇通として聞えた、富田砂蓮（略）本名を利三郎といふて、商館番頭を勤めていたので、福井（茂兵衛）は、富田の家へ引取られて」とある、砂蓮と同一人物であろう。

二十一　関口文七の実伝に付いては萩原進氏「群馬遊民伝」に触れる処がある。

二十二　「痴遊随筆」に「大名屋敷に、忍び込んで、巧く仕事をする調子は、恰で其状が現はれて来る。泥棒

心のないものでも、あんな工合にやれたら、面白からうと思ふ位ゐであつた」とあるが、速記本にはない。恐らく「相馬大作」の上演に困難がつきまとった如く大名華族への配慮であろう。

二十三　青木正次氏「『塩原多助一代記』の性格」（「藤女子大学文学部紀要・4」。昭和四十一年七月）参照。

二十四　越智治雄氏「もう一人の塩原多助」（「文学」昭和四十四年五月）参照。

二十五　北川鉄夫「森鷗外と『鈴木藤吉郎』の出身」（「部落問題文芸・作品選集」月報2）

二十六　但し万年一氏「三遊亭円朝逝く」（前掲）には「この二人の邂逅は病中の陰気を払い、室内に漸新の空気を導入、涼味を久し振りで両者は短い一時を楽しんだ、死期の迫った円朝を心から慰め合つた美談として都新聞に載つた」とある。「三遊亭円朝」の挿話は藤浦富太郎氏の憶い出である。

本稿を草するに当り、御教示を賜わりました永井啓夫先生、肥田晧三氏、吉沢英明氏、また御珍襲の書を御恵与、御貸与賜わりました浅川征一郎氏、足立巻一氏、田辺孝治氏、向井信夫先生、山口武美先生、「円朝考文集」掲載予定の本稿を快く御返却下さいました窪田孝司氏に深謝致します。

追　記

その後見得た単行本に就き記す。

◎「浮寝の仇夢」。松林伯円講演酒井昇造速記。明治廿五年六月。四六。仮綴石版。口絵見開一（桂舟）。挿絵見開二（画工名なし）。百二十頁（口絵、挿絵を含む）。口絵挿絵の各裏面は白紙）。礼紙。扉。第八回。序なし。京橋区本材木町三丁目廿六番地　三友舎。八銭。「東錦」一号。「明治開化期文学の研究」によれば「浪枕隅田藻」との単行本もある由。

◎「菅公」。依田学海先生校閲松林伯円謹演松林若円筆記。明治三十五年三月。菊（変形縦長）。仮綴石版。折込木版一（古洞）。題詞（依田学海）二頁・写真四葉。口条（若円）四頁。目次六頁。本文二百四十三頁。第二六葩（松の巻・梅の巻・桜の巻）。日本橋区本町三丁目博文館。参拾五銭。なお写真は、第一葉（京都北野天満宮）、第二葉（東京亀井戸天神・大阪天満宮）、第三葉（太宰府天満宮正面）、第四葉（太宰の飛

梅。下段右、松林若円半身像。左、束帯姿の松林伯円の四分の三身像）。ヒゲ若の諱名に違わず若円は髭面。

◎「西南余聞　雪振袖」と「烈女おてるの伝」は同一書と思われる（前者未見ながら、後者の内容より推して）。

◎「浮沈梅柳新話」・「吉備大臣入唐記」・「鬼神のお松」・「静旗帯」・「薮井玄龍」の存在が予想されるが未見。

（名古屋大学）